

(第4号より続く)

第12章：数と数詞

会話の流暢さはまた数やものの数詞 [すなわち数え方]、および時間、時刻、日、週、月、年、世紀の数え方に対する知識の多さにかかっている。ゆえにわたしはこの章を入れる必要があると考え、ほかの章と同じように、パラグラフと [セクション] に分けた。順番としては、最初に数、その次に数詞を知ることが重要であり、数を最初のパラグラフとする。

第1パラグラフ：数

1. 次に数を示す：「1」「一」、「2」「二」または「兩」、「3」「三」、「4」「四」、「5」「五」、「6」「六」、「7」「七」、「8」「八」、「9」「九」、「10」「十」、「11」「十一」、「12」「十二」、「13」「十三」、「20」まではこのようである。つまり「10」と「6」のように、最初に高い数を言い、後ろに低い数を言う。「20」は「二十」で、これは「10」を2回という意味である。「21」「二十一」、「22」「二十二」。21以上を言うためには、最初に2、次に10、それから1から9までの小さい数を並べる。例：「29」「二十九」、「30」「三十」。100までこのようである。100は低い数を前に置く。「100」「一百」、「200」「二百」、千までこのようである。千は低い数を前に置く。「千」「一千」、「二千」「二千」、一万までこのようである。「一万」「一萬」、「二万」「二萬」、十万を含めてこのようである。「十万」は「十萬」、すなわち一万が10回である。「二十万」「二十萬」、百万までこのようである。「百万」(スペイン語の場合)「一百萬」、ポルトガル語の場合「一千萬」、「二百万」「二百萬」または「二千萬」、「一億」「萬萬」、「無数」「無數的」。

2. 20から29までには、他の数にはない、別の数え方がある。すなわち「廿一」「廿二」「廿三」。この数え方は月の相を計算するのによく用いられる。例：「28ヶ月」「廿八」。「104」と言う場合、「多」または「零」を残りの数の前に置かなければならない。例：「104」「一百零四個」または「多四個」。「110」と言う場合、「一百一十個」と言う。直訳すれば「一百と一十」である。注意点が2つある。第1に、10以上の数に2がある場合、すなわち12、20、22、32などの2は、「兩」ではなく「二」を用いる。例：「12」「十二」、「20」「二十」、「22」「二十二」、「32」「三十二」など。「12」を「十兩」、「20」を「兩十」などと言ってはいけない。第2に、我々が「3か4」「6か7」と言うのと同じような言い方が官話にもあるが、離接的接続詞は用いない。例：「3か4」「三四個」、「6か7」「六七個」。しかし接続詞なしでは「9か10」を言う事はできない。なぜならこの場合数と意味が大きく変わってしまい、「九十個」は「90」を意味するからである。この場合接続詞「或者」を使う。例：「或者九個或者十個」[9か10]。10より下には接続詞はいらない。

第2パラグラフ：数詞

1. 数詞は主に“個”を数字のすぐ後に置くことにより示される。もし独自の量詞をもち、それによって数えられるならば、その場合“個”ではなく専用の量詞を用いる。例：「4人」「四個人」、「6冊の本」「六本書」。最初の【例】に“個”を用いるのは、人間を数えるのに特定の量詞がないためである。次の例に“個”を用いないのは、本には“本”という独自の量詞があるためである。特定の量詞がない場合“個”は絶対に必要であり、“個”がなければ意味が変わってしまう。例：「4つの硬貨」「四個錢」。もし“個”を用いずに“四錢”と言ったなら、それは「銀貨4リアル」を意味する。「6ヶ月」は“六個月”。これにもし“個”を用いなければ“六月”となり、「6月」を意味してしまう。ゆえに“個”に関しては注意深くなければならない。

2. ものを数える量詞を知れば、間違いなく官話を正しく話せるようになる。全くの最初から量詞に精通するために、私はここによく用いられるものを挙げ、学習の助けとする。全て前に数を置く。例：「1回の食事」「一餐」、「2階建て」「兩層樓」、「3つのふし、または継ぎ目」「三節」、「4つの切片」「四剝」、「5頭の四足獣」「五くゝまたは四頭」、「6頭の馬」「六匹」、「7枚の折り畳んだもの【平らなシーツ】、または章」「七張/章」、「8艘の船」「八隻船」または“八號船”、「9つの分隊」「九陣」、「10体の像」「八張像」。「1軒の家」「一棟房子」、「2つの汁碗」「兩塊碗」、「3つの一続きのもの」「三串」、「4枚の日よけ、裏地、重なったもの」「四重」、「5通の封書」「五封書」、「6名の尊敬すべき人、または高位の人」「六位」、「7つの墨の固まり」「七盒墨」、「8本の大きな棒、茎、または帆柱」「八杆」、「9回の鞭打ち、または殴打」「九下」、「10回の棒による殴打」「十棒」、「鞭によるもの」「十鞭」。「1粒」「一粒」また米の場合は“一顆米”、「2梱または2束」「二細」または“兩縛”、「3つの柄、3束」「三把」。「4枚の服」「四領」、「5反のシルク、またはマント」「五疋」、「6本の枝、棒、紐」「六條」。「7袋の葉」「七帖葉」。「8枚の紙、葉」「八葉」。「9つの言葉」「九句」。「10本の鉛筆、万年筆、小枝、釘」「十枝」。「1本の針」「一枚針」。「2個、破片、固まり、板」「兩塊」。「3組」「三雙」または“三對”。「4冊の文学作品」「四部」。「5匹の魚」「五尾」。「6梱の紙」「六套」。「7列」「七行」。「8lazondas (1) 分の植えられた土地」「八畝田」。「9つの神秘的教義、祈り」「九段」。「10枚の服」「十個」。「1つの荷」「一擔」または“一挑”。「2巻の本」「兩本」。「3脚の椅子、机」「三張」。「4つの出来事」「四件」または“四椿事”。「5つの旅行椅子」「五頂轎」。「6つの丘、山」「六頭嶺」。「7篇の文章、華麗な文」「七篇文章」。「8つの羊の群」「八群」。「9本の道」「九條路」。「10本のうちわ、ステッキ」「十把」。「1つの帽子」「一頂帽」。「2本のろうそく」「兩枝燭」。「3つの手袋、ベッドカバー」「三張」。「4都市」「四城」。「5本のスプーン、槍、劍」「五把」。「6冊の複写簿」「六卷」。その他のものについては、慣用法から学んで欲しい。

第3パラグラフ：序数詞

すでに6章第3パラグラフの1で、序数詞は“第”の前置によって示されることを説明した。

例：「地球上で最初の間人はアダムだ」「世界第一個人就是 Atam」。「最初」を示すのに“第”の代わりに“頭”を用いる場合もある。例：「最初にキリストに従った使徒は聖アンドリューだ」「宗徒頭一個隨從 Jesu, 就是聖 Gantele」。最初の月、2番目の月などを示す場合、“第”ではなく、月が順番に対応する数だけを用いる。例：「ピーターは6月に戻る」「Petolo 六月纔回」。序数詞に関して、わたしが知っているのは以上である。

第4パラグラフ：時間、日、週、月の数え方

1. 1日の時間は中国式の数え方では12しかない。彼らの1時間はわれわれの2時間あたり、以下のように数える。午後11時から1時までを“子時”（それぞれ“時”がつく、これは「時間」「時」を意味する）、1時から3時までを“丑時”、朝の3時から5時までを“寅時”、朝の5時から7時までを“卯時”、7時から9時までを“辰時”、9時から11時までを“巳時”、11時から1時までを“午時”、1時から3時までを“未時”、午後3時から5時までを“申時”、5時から7時までを“酉時”、7時から9時までを“戌時”、午後9時から11時までを“亥時”[と言う]。時間の始めには“初”を前に置き、まん中には“正”を用いる。時間の終わりには“末”を用いる。もし我々の「～時」という表現を用いて時間を告げようとするなら、上述の語彙を1つ用いれば理解されるだろう。

2. 日に関する特別な数え方はない。単に「4日」「5日」と月ごとに最初から数えるだけである。日は“天”または“日子”と言う。朝は“早”、午後は“晚”、昼と夜は“晝夜”と言う。「午前中の半分」「半上午」「午後12時ちょうど」「午上」または“午？”または“正午”、「午後12時以降」「下午」「午後の中頃」「？下午」「真夜中」「半夜」または“子上”または“子正”。クリスチャンには曜日の特別な数え方がある。ある地域では次のように数える。「日曜日」は“主日”すなわち「神の日」であり、「月曜日」は“主二”すなわち「週の2日目」，“主三”は「週の3日目」、このようにして土曜日まで続き、“主七”が「土曜日」となる。他の地域では“主日”を「日曜日」「神の日」とし、「月曜日」が“主一”、「火曜日」が“主二”となり、このようにして土曜日まで続き、“主六”が「土曜日」となる。この場合月曜日が1日目、火曜日が2日目、最後が日曜日となる。これは全て1つの[単位]として機能する。宣教師は自分が配置された場所に注意して、その土地の曜日の順番に従わなければならない。もしそこに特定の曜日がなければ、好きな方を使えばよい。金曜日を“痛苦日”と呼ぶ習慣がある。これは「受難の日」を意味する。土曜日は“聖母日”、これは「聖母マリアの日」を意味する。語彙集では週の呼び方は見つからなかった。わたしの考えでは、週は“一個主日”と訳し“每七日為一個主日”と言えよと思う。祝祭日は“瞻禮日”と呼ばれる。秘跡や聖人の祝祭日を明示しようとするなら、“日”を使う必要はなく、祝祭を表す単語の前に秘跡や聖人の名前を置くだ

けでよい。例：「キリスト復活の日」「復活瞻禮」、「聖フランシスコの日」「聖 Fancico 瞻禮」。
 “日”を使えば、口調がよくなる。[例] “復活瞻禮日”。

3. 中国の1年は12ヶ月である。3年に1度、5年に2度閏月がある。つまり5年の間に2度閏月がある。閏月がある年はその結果1年が3(2)ヶ月となる。30日ある月は、“大月”または“大盡”と呼ばれる。29日しかない月は“小月”または“小盡”と呼ばれる。月は数字によって数えられる。1年の最初[の月]である1月は“正月”と呼ばれる。2番目の月は“二月”、3番目の月は“三月”、その他も同様に続き、12番目の月は“十二月”または“臘月”[と呼ばれる]。この以外に別の言い方もある。それは書き言葉に用いられるもので、四季すなわち、春、夏、秋、冬を使って数えるものである。春の最初[の月]は“孟春”、2番目の月は“仲春”、3番目の月は“季春”と呼ばれる。夏の最初(年の4番目)[の月]は“孟夏”、2番目の月は“仲夏”、3番目の月は“季夏”と呼ばれる。(秋の最初(年の7番目)[の月]は)“孟秋”、2番目の月は“仲秋”、3番目の月は“季秋”と呼ばれる。冬の最初(年の10番目)[の月]は“孟冬”、2番目の月は“仲冬”、3番目の月(1年の終わり)は“季冬”と呼ばれる。新月は“朔晦”または“晦朔”、朔月は“月朔”、弦月は“月弦”、最初の弦月は“上弦”、2番目の弦月または満月は“月望”、3番目の弦月は“下弦”と呼ばれる。月の最初[の日]から10日までには、数字の前に“ch’ü 初”が置かれる。この字を“ch’o 初”と発音する人もいる。例：「3日」「初三」、「10日」「初十」。他の数え方もある。月の最初の日から10日までを(10日間まとめて)“初十間”、“初十邊”、“外候”と言い、約10日間という意味である。10日から20日まででは“上旬”、20日から30日まででは“下旬”と言う。月食は“月蝕”。時間、日、週、月とその数え方についてわたしが知るのは以上である。次は年について記す。

第5パラグラフ(3)：年の数え方

1. 年を数える一般的な方法は、“年”(または「年」を意味する別の言葉)の前に言いたい数字を置く。例：「4年」「四年」(4)または“四載”、“20年”“二十年”。この他に年を数える特定の方法がある。それは周期のようなもので、次の10文字を用いる；“甲”、“乙”、“丙”、“丁”、“戊”、“己”、“庚”、“辛”、“壬”、“癸”。この10文字はこの順番通りに最初から始められる。この10文字にはさらに中国人が昼と夜の時間を数えるのに使う12文字がそれぞれ加えられる(5)。その順番は真夜中の時間を意味する文字から始まる。ゆえに年文字の最初である“甲”に11時から1時を意味する“子”を加えて“甲子”と言う。こうして1年目が決まる。年文字の2番目である“乙”には1時から3時を意味する“丑”を加えて“乙丑”と言う。これが2年目である。このようにして年文字を10番目まで数え、それに時間文字を対応させていく。10の年文字に12の時間文字中の10文字を対応させ終わると、時間文字が2つ、7時から9時の“戌”と9時から11時の“亥”が残される。すると今度は年文字はまた最初に戻り、“甲”から始められる。そして11番目の時間文字である“戌”を加えて“甲戌”(11番目の

年)となり、12番目の年は“己亥”となる。12の時間文字がいったん完了すると、一番最初に戻って年文字の後に加えられる。この場合年文字は3巡目であり、13年目を表す“丙子”となる。“丙”は年文字の3番目、“子”は時間文字の最初である。10の年文字が完了するまで続けると、今度は4つの時間文字が残される。すると同様に、また年文字の最初である“甲”に戻り、残された4つの時間文字の最初である“申”を加え、“甲申”と言う。これは21年目である。このようにして、年文字と時間文字の結びつきが再び全く同じになるまで、つまり時間文字が1つも残らなくなるまで続けられる。すなわち10の年文字が6巡することになる。年の1巡目では時間文字が2つ残される。2巡目は結果として時間文字が4つ残され、3巡目は6つ、4巡目は8つ、5巡目で10が残される。時間文字が10残された結果、6巡目で年文字と数が等しくなる。すなわち年文字の最後が時間文字の最後と並び“癸亥”となる。これは10の年文字と時間文字が6巡したのであるから、60番目となり、すなわち60年目となる。そしてもう一度最初から始まる。

2. この数え方をはっきりと見るために、60年の表をここに書き入れる。注意しておきたいのは、西暦1624年、すなわちわれわれの目録が開始された年から数えはじめたい。より明瞭にするため、文字[すなわち漢字]の前には西暦を記した。

1624	甲子	1625	乙丑	1626	丙寅	1627	丁卯	1628	戊辰	1629	己巳
1630	庚午	1631	辛未	1632	壬申	1633	癸酉	1634	甲戌	1635	乙亥
1636	丙子	1637	丁丑	1638	戊寅	1639	己卯	1640	庚辰	1641	辛巳
1642	壬午	1643	癸未	1644	甲申	1645	乙酉	1646	丙戌	1647	丁亥
1648	戊子	1649	己丑	1650	庚寅	1651	辛卯	1652	壬辰	1653	癸巳
1654	甲午	1655	乙未	1656	丙申	1657	丁酉	1658	戊戌	1659	己亥
1660	庚子	1661	辛丑	1662	壬寅	1663	癸卯	1664	甲辰	1665	乙巳
1666	丙午	1667	丁未	1668	戊申	1669	己酉	1670	庚戌	1671	辛亥
1672	壬子	1673	癸丑	1674	甲寅	1675	乙卯	1676	丁未	1677	丁巳
1678	戊午	1679	己未	1680	庚申	1681	辛酉	1682	壬戌	1683	癸亥

この年号は全部で60字あり、60年目、すなわち[16]83年[からは]最初に戻る。ゆえに[16]84年は“甲子”であり、表にあげたのと同じ順序に従って続いていく。

3. 宣教師が官話をじょうずに話すためには、この計算方法を学ぶことが必要である。なぜなら毎日誰かが彼に年齢や、その土地に[どのくらい]駐在しているのか、などとたずねるかもしれない。そういった質問の答えとしては、上述の文字[の組み合わせ]を用いた年号が要求される。もし宣教師が本当にそんなものがあることを知らず、逆に「いくつですか。」とたずねたなら、それは彼がこれを理解していないからなのだが、中国人はそれが[す

なわち彼の知識不足が] 誤解の原因であることに気づかないだろう。彼が数え方(6)を知っているものとして[尋ねた]ためである。また中国人に何年に生まれたか、何年に彼らの王国に入ったかなどをたずねられたときにも、これを知っているとよい。そしてこの計算方法を用いて答えるのがよい。この年の計算方法は“六十花甲子”すなわち「甲の60文字の印」と呼ばれる。なぜなら次々と入れ替わり混成されるからだ。年は“年”、閏年は“閏年”、1年の始まりは“?年”、“?正”、“正月初一”と呼ばれる。1年の最後の夜は“三十晩”、“三十年夜”と呼ばれる。中国人の周期[すなわち「年代」または「紀元」]は30年で、これは“一世”と呼ばれる。彼らはまた彼らの語彙である「周期」を、父から子へ、子から孫へのように、1つの世代から次の世代への[移行]として用いる。彼らにはまた別の年を数え方があり、それはそれぞれの王の治世による。たとえば「いつ王国に入りましたか。」という問いの答えとしての“康熙十五年”、これは現在の王の治世である、「康熙帝の治世15年目」を意味する。「何年に宮廷にいましたか」という問いの答えとしての“順治十年”。これは今年[16]82年を治世する現在の王の父である、順治帝の治世10年目を意味する。いちど[その人が生まれた]治世年をいってもらえば、すぐにその人がいくつか確認できる。

4. 注意点として、「半分」という概念は、時、時間、日、月、年だけでなく、もの[たとえば]ガンタ、斤、荷、反物などにも“半”という虚詞が前置する。たとえば、「半時間」は“半時”、「半日」は“半天”、「半月」は“半个月”、「半年」は“半年”、米や麦など「半ガンタ」は“半斗”、「半斤」は“半斤”、「半荷」は“半擔”、「半反」は“半疋布”など。“半”を前置して“月半”“年半”といえは意味が変わり、「月のまん中」「～年半」という意味になり、両者は大いに異なる。度量衡の計算方法については、特に記すことはない。「お金」は“錢”、「ダカット」は“兩”、「ダカットの10分の1、リール」は“一錢”、「リールの10分の1」は“分”、「分の10分の1」は“釐”、「釐の10分の1」は“毫”、「毫の10分の1」は“絲”、「絲の10分の1」は“忽”、「忽の10分の1」は“微”、「微の10分の1」は“纖”、「纖の10分の1」は“秒”である。銀に対する欲望と野心に駆り立てられたこの国では、その結果として硬貨をこれ以上分割できない程度にまで細かくする方法が考案されたことがわかる。

13章：様々な虚詞

1. この13章ではいくつかの虚詞の使用方法を説明する。音を知ることにより、新任宣教師は虚詞をうまく扱えるようになるだろう。しかし注意してほしい。この章に含まれるすべての虚詞はそれぞれ独自の方法でよく用いられるものだが、これらを濫用してはいけない。なぜなら[修辭的な]欠点と重複になってしまうからだ。それぞれの虚詞には3つか4つの例をあげた。それにより使用方法はより明瞭になるであろう。

虚詞“當”

2. この虚詞は形式、意味、使用法からいって、我々が「それほどよくない、それほどはつきりしてない、それほど高くない」などというときの、スペイン語の虚詞 *tan* [~のよ] に相当する。これこそがこの言語の [“嘗”] 使用法にほかならない。たとえば、「それほどはつきりしていない」は“不嘗明白”、「それほどよくない」は“不嘗好”、「それほど高くない」は“不嘗高”。「彼はそれほどうまく話せない」は“不嘗會講”。「それほど遠くない」は“不嘗遠”。「彼はそれほど金持ちではない」は“不嘗富貴”など。

虚詞“一”

3. この虚詞は数字の「1」である。ある重ねられた動詞のまん中に用いられると、反復の意味をもたらす。これはラテン語や我々のカスティーリャ語では、「命令する」[に対する]「差し戻す、何度も命令する」、「期待する」[に対する]「さらに期待する」、「見る」[に対する]「もう一度見る、一瞥する」などにあたる。“一”が附属する動詞の意味によって生じる意味は異なる。たとえば、「一瞥する」「看一看」、「しばらく待つ」「等一等」、「やってみる、味わう」「試一試」、「しばらく行く」「走一走」、「聞く、耳を貸す」「聽一聽」。浙江省ではこの構造がよく用いられる。他の [省] ではそれほど一般的ではないが、少なくとも上述した例は用いられる。

虚詞“打”

4. この虚詞は「打つ、攻撃を加える」を表し、この言語では以下の例に見られるように、たくさんの複合語を作るものとしてよく用いられる。「家や船を修繕する」「打整」、「誰かを起こす」「打醒他」、「まき散らす、散布する」「打散」、「くしやみをする」「打嚏」、「判を押す」「打印」、「うばう、強奪する」「打劫」、「狩る」「打獵」、「スパイする、スパイになる」「打聽」、「うちわで自分に風を送る」「打扇」、「うたたねする」「打盹」、「糸を巻く」「打線」、「十字を切る」「打十字架、打聖號」。以上の例から切断する、うつなどを意味する日常的なあらゆる動作に用いられることがわかる。注意点として、これらの表現はとても一般的だけれど、彼らは言いたいことを表現するのに、より多くは虚詞“打”を用いない。

虚詞“得”

5. この虚詞“得”は、「できる」や「うまくいく」を表し、すでに 7 章第 2 パラグラフの 5 と 6、2 章第 3 パラグラフの 2 で扱った。使用法に関してはこれらの箇所を参照してほしい。すでに述べられたこと以外に、一般的で上品な、特定の意味がある。それは否定詞“不”の間にあるときで、うしろに動詞や副詞をともなう。すると動詞や副詞の意味に応じた肯定の意味が生ずる。

例：「彼はそうあらざるをえない」「不得不是」。「ほかになすすべはない」「不得不然」。「彼は行かざるをえない」「不得不去」。「彼は来ざるをえない」「不得不來」。「彼は彼を罰せざる

をえない」「不得不罰他」。「彼は許さざるをえない」「不得不准」など。

また虚詞“得”は「王のお気に入り」、「人から愛される、嫌われる」と言う場合にも使う。これは人が王に寵愛される、人に憎まれるに至ったと言うのと同じである。“得皇帝寵愛”など。

虚詞“著”

6. この虚詞は本来、話や行為などが「的を得ている」ことを表す。[例]「彼は話がうまい」「講得著」、「わたしは彼らの言うことを聞いた」「聽得著、聽著」、「わたしは拾いあげた」「拿著、拿得著」、「彼は正しい行いをした」「著了」、「彼は不適当なことを言った」「講不著」。

虚詞“替”

7. この虚詞は厳密には代えるや誰か他の人のために何かすることを表す。たとえば「彼のためにする」「替他做」。この他に、彼らはをよく何らかの行為を表す主題や語彙とともに使う。例：「彼らを洗礼する」「替他洗」。「わたしは司祭に彼に終油の秘跡を授けてくれるように頼んだ」「求神父替他敷聖油」。

虚詞“然”

8. この虚詞は肯定的副詞の形成に用いられる。多くはある程度一般的で上品な話し方に使う。例：「はつきりと」「自然」、「ふさわしい、好都合で」「該然、忽然」、「とつぜん」「卒然」、「別な方法で」「別然」、「本当に」「必然、果然」、「等しく、同じように」「亦然」、「実質的に」「質然」、「正式に」「模然」など。

虚詞“今”

9. この虚詞は現在の時、すなわち時間、日、月、年、世紀を表すのに用いられる。それぞれの例：「いますぐ」「今節、今刻」、「この時間」「今時」、「今朝」「今早」、「今日の午後」「今_」、「今日」「今日」、「今晚」「今夜」、「今月」「今月」、「今年」「今年」、「今世紀」「今世」。

注意点として、3 (7) で述べたように、これは他の方法や他の語彙を使っても言うことができ、よく“間”を時間に後置させる。この場合“間”は「の」、すなわち言及された語彙の時間（すべての〔場合〕ではない）に応じた時間や日など「の中」という意味をもつ。たとえば、「早間」「朝に」、「_ 間」「午後に」。

虚詞“便”，“百”，“可”

10. 虚詞“便”は「故意になされた、便利な、使いやすい」という意味をもつあらゆるものに用いられる。たとえば、「用意ができた」「便了」。「有利な値段で買った」「買得便宜」、

「用意できましたか」「便了麼”。否定詞“不”を前置すると、反対の意味をもつ。ゆえに不便さを表現するのに用いられる。たとえば、「クリスチャンにとってその娘が異教徒と結婚するのは非常に不便である」「教中人嫁其女兒與教外的，大不便”。“便”はこの意味でよく使われる。

11. 虚詞“百”は「100」を表すが、また一般性および omnis [全て] も表す。たとえば、「全ての家臣」「百民，百姓”、「全ての果物」「百果”、「地球上の全ての動物」「百獸”。“可”は [5] 章第 [1] パラグラフの [1] で紹介した使用方法とは別に、特殊な使用方法がある。[たとえば]「全く残念だ」「可惜”、「できる」「可做”、「他にどうでしょう」「可不是”。この“可”は音の響きがよく、明瞭で、上品である。しかし加減して使うべきだ。これらはわたしに提供された虚詞であり、話し言葉でよく使われるため、ここに含めれば役に立つと考えた。古い文法（と呼ばれるもの）(8) にはこの他にいくつか“了”，“起”，“來”，“去”などがあるが、語彙集で見つけることのできる普通の意味以外に特別な意味はない。それはこの文法の論述から推測できるものである。“請”，“令”，“賤”，“貴”のような丁寧な言葉 [敬語] に属する虚詞は、次の章で取り扱う。ゆえに上で述べたことがこの言語の一般的な内容であると言ってしめくりとしたい。

12. 規則としてはまとめられない経験による学習、という別の方法もある。初学者が [言語学習] の開始にともなう困難さのうち勝つための道を開き、彼らに光をあてるもの、それ自体にもし何の方向性もないとすれば、苦痛と悲しみが生じるであろう。[そのような状況では] 学ぶのはより困難であり間違いやすいのは確かだ。この不便さを知り、ドミニコ会士はできるだけ早く文法を編纂した。この文法は先の文法の基本的な規則を踏襲している。わたしはこの国にわれらの神聖なる教えを伝道にきた宣教師に今の形で提供する。これらの規則が全て正確であり、規則に従えば [その人の] 会話が確実となることが望まれる。[中国語の] 慣用表現はとても難しく、その習得には彼らとの会話が必要となる。また (現時点では、1 章注意事項の 4 に示した環境で) 彼らの本を読む [ことも必要である]。まず最初に読むべきは、われらの聖なる教えについての [本]、*“聖教要訓”*、*“主教要罪論”*、*“初會問答”* などである。これらは単純で、すでにわれわれが知っているものを扱っているため、学びやすい。ここから先は“孔夫子”と“孟子”によって [書かれた] *“四書”* と呼ばれる本に進む。それを学んで記憶すれば、最大限に努力するものを見捨てない神のご加護により、自分でかなりの量を学ぶことができる。時にはこれらの本にある 4 文字の文一つで考え全体を説明することができる。そして宣教師の言葉を聞いた中国人はその宣教師がヨーロッパの科学だけでなく、彼ら自身の [すなわち中国の] 本も学んでいると考え、[彼らの間での] 評価はより高まり、[中国人は] 宣教師に対して徐々に敬意の念を抱くようになるだろう。

14章：官話の礼儀正しい言葉

他の文法に習い、礼儀正しい言葉と、対外的に用いる丁寧な言葉の使用法と、儀礼的訪問に関連する書面での自称について、ここで紹介するのがふさわしいと思われる。なぜなら宣教師にとってこれらの問題は全て最新のものでなければならないからだ。中国人はとりわけ礼儀や儀式を重んじ、それらに多大な注意を払う。彼らは誰かの地位と肩書きがその人の[実際の]地位よりも軽んじられたときの、ことごと対外的な礼儀作法に関して非常に敏感である。宣教師はこのことをよく注意しなければならない。なぜなら宣教師がこれらに気を付けることにより、彼の好意が中国人に伝わり、中国人は彼の味方となり、彼らは敬虔な愛情をもって彼に従い、そして彼らの魂に恩恵がもたらされるからだ。ここに合わせて現在丁寧な言葉として用いられる語彙をあげるのが適切であると思われる。そうすればより覚えやすくなるであろう。

第1パラグラフ：虚詞“令”

この“令”はとてもよく用いられ、常に会話をしている相手の親族か親類関係にある人物を表す語彙に前置される。例：「あなたの尊い人 [父]」「令尊」、「母」「令堂」、「むすこ」「令郎」、「むすめ」「令愛」、もしとても幼いなら「令千金」。注意点として、これら4つ [の表現] は、もし“令”を使わなければ、そういう意味にはならない。ほかの親族 [名称] は、“令”を使わなくても [基本的に] 同じ意味をもつが、[敬称] ではない。[次の例:] 「あなたの尊い祖父」「令尊翁」、「あなたの尊い祖母」「令祖母」、「兄」「令兄」、「弟」「令弟」、「姉妹」「令姐妹」、「義父」「令岳父、丈人、岳父」、「義母」「令岳母、丈母」、「父方の上のおじさん」「令伯」、「下のおじさん」「令叔」、「母方のおじさん」「令伯舅」、「母方のおばさん」「令嬢嬢」、「おばさん、父方の上のおじさんの奥さん」「令伯母」、「おばさん、父方の下のおじさんの奥さん」「令叔嬢」、「義理の姉」「令嫂」、「義理の妹」「令弟媳」、「奥さん」「令正」、「親戚」「令親」、「姻戚」「令親家」、「甥と姪」「令姪」、「まご」「令孫」、「まごむすめ」「令孫女」、「執事」「令管家」、「召使い」「令价」、「弟子」「令徒弟」。これらの語彙は官僚ではない、官僚になったことのない尊敬すべき人物と会話するときに用いる。彼ら [すなわち官僚] に用いる語彙は後で取り上げる。もう一度注意する。この“令”は人間にしか用いない。

第2パラグラフ：“貴”

この“貴”はわれわれと話している人に属するものを名付けるのに用い、その意味は「貴重な、裕福な、崇高な」である。例「あなたの崇高で貴重な王国」「貴邦、貴國」、「その人の省」「貴省」、「その人の市」「貴府」、「その人の町」「貴縣」、「その人の所」「貴處」など。「その人の体」「貴體」、「その人の目」「貴目」、「その人の手」「貴手」。その他の体の一部も同様である。「その人の健康」「貴恙」、これはその人が病気の時に用いる。「その人の家」「貴家」、

「その人の宿」「貴寓」、「その人の年齢」「貴庚」。その他のものも同様である。

第3パラグラフ：“尊”、“高”、“位”

1. “尊”の意味は崇高であり、ある語彙に前置する。例「あなたの姓」「尊姓、貴姓」。「その人の名前」（これは彼らが呼ばれている名前であり、これを彼らは「小さな名前」「小名」と言う）「尊號、尊表」。「その人の親類」「尊族」、「あなたの命令」「尊命」、「その人の椅子籠」「尊轎」、「その人の馬」「尊馬」。注意点として、人と話すときにはその人の本当の名前を呼んではいけない。また“尊”や“貴”を前置しないかぎり、それを指す[すなわち「人名」を意味する]“名”を使って人の安否を問うてもいけない。しかし“諱”を使って尋ねることはできる。例：「あなたの名前」「諱、尊諱」。

2. “高”の意味は「高い」であり、年長者の年齢を尋ねるときに使う。例：「あなたの年齢」「高壽」。また豊富な知識や、熟練した技術などをもつ人を賞賛したいときにも使う。例「その人の知識」「高明悟」、「その人の腕」「高手」など。“位”の意味は「位階、地位」などである。対話者である個人と関係のある人を数えるのに使う。例「息子さんは何人ですか」「幾位令郎」、「汝ら」「列位」、「2人の兄弟」「兩位兄弟」など。これらの語彙は対話者に属する人を呼ぶときに使うだけでなく、その他の尊敬すべき[すなわち位や社会的地位の高い]人物の目の前にいて、その人の息子や父親などに話が及ぶときにも使う。この様な状況ではあたかも彼らに属する人がその場にいるかのように呼ばなければならない。このことには特に注意すべきだ。

第4パラグラフ：“家”、“息”、“先”、“小”

これらの語彙は対話者の前で謙遜するためのものであり、実際には光栄に思うものに使う。

4つの虚詞はそれぞれ個別の用法をもつ。“家”の意味は「家」であり、話し手よりも目上の存命中の親類を呼ぶのに使う。[当人]を意味する語彙に前置する。例：「わたしの父」「家父」、「わたしの母」「家母」、「わたしの祖父」「家公」、「わたしの祖母」「家祖妣」、「わたしの兄」「家兄」、「わたしの父の兄であるおじ」「家伯」、「わたしの父の弟であるおじ」「家叔」、「わたしの母方のおじ」「家母舅」。同様にその他あらゆる年長者の親類には、この章の第1パラグラフで述べた語彙に“家”を前置する。もし話している親類が年下なら、“家”の代わりに“息”を用いる。例「わたしの弟」「息弟」、「わたしの甥」「息姪」、「わたしの義理の弟」「息私」、「わたしの親類」「息親」。“息”の代わりに“舍”を使うこともできる。例「舍弟」、「舍姪」など。話される人物が息子、使用人、女性の場合は、“小”を使う。[例]「わたしの息子」「小兒」、「わたしの娘」「小女」、「わたしの使用人」「小价」、「わたしの妻」「小妻」。妻を呼ぶ場合は、上述のもの以外に次のパラグラフで紹介する語彙もある。“先”は、息子や娘、甥姪、孫を除く、亡くなった親族を呼ぶのに使う。例「わたしの亡父」「先父」、「わたしの亡母」「先

母”、「わたしの死んだ兄」「先兄」、「死んだ弟」「先弟」。他も同様である。

第5パラグラフ：“敝”，“賤”，“寒”

“敝”と“賤”はその人のものや、その人自身に属するものに使う。意味は「卑しい、粗末な」である。どこにどのように使うかを見るためにいくつかの例をあげる。「わたしの粗末で卑しい王国」「敝邦，敝國」、「省」「敝省」、「市」「敝府」、「町」「敝縣」。「わたしの卑しい場所」「敝處」、「わたしの粗末な地位」「敝位」、「わたしのみすぼらしい名前」「敝姓」、「わたしの弟子」「敝徒」、「わたしの友人」「敝友」、「わたしの妻」「敝房」、「わたしの妾」「敝妾」、「わたしの名前」「敝姓」(9)、「わたしの階級」「敝質」。下級官僚は上官の前で自分自身に言及する場合、“賤”を使う。[例]「わたしの健康」「賤恙」、「わたしの体」「賤體」、「わたしのみすぼらしい名前」「賤名」、「わたしの妻」「賤房」。“寒”は家と呼ぶときにだけ使う。[すなわち]「わたしの家」「寒家」。「わたしの教会」と言う場合は、“寒堂”よりも“敝堂”と言ったほうがよい。

第15章：官僚とその親類、その他の人をどう呼ぶか。

及び口頭と書面で自分にどう言及するか。

前の章で扱った語彙は尊敬すべき人だけに適用されるが、これ以外にも話している、または話題となった人をより強調する別の【語彙】があり、その【語彙】は他の人に使うことはできない。ゆえにこの章ではこの範疇と、合わせて手紙に用いられ、間違うと非常に不便である、公的な訪問に関する書面で自分自身に言及する方法を取り扱いたい。

第1パラグラフ：官僚をどう呼ぶか

実際に裁判所で聴衆(10)の前に座っているとき、官僚は“老爺”「老卿」と呼ばれる。[ある階級にある]官僚は、[相対的な]重要度に従って呼ばれる。省の官僚は“本道”と呼ばれ、市の長官は“本府”[と呼ばれる]。町の官僚は“本縣”[と呼ばれ]その他も同様である。下級官僚は、召使い、[すなわち]書記や下役などである以上、彼らの上役である官僚の前では自分のことを“小的”「小さいもの」と言う。何であるかにより官僚を呼ぶことができる。太守、会計官、判事、領主などは“大老爺”と呼ばなければならない。市や町の長官は“老爺”，“老大人”[と呼ばなければならない]。“學官”(11)、修士、博士は“老先生”[と呼ばなければならない]。彼らはまた“老爺”とも呼ばれ、特にわれわれにはこの語彙が使われる。“總兵”や“參將”のような軍人も“老爺”や“老鎮臺”と呼ばれる。階級が低ければ“將臺”である。官僚としての名声がある人は、実際には官僚ではないばかりか、教師や博士ですらなくても、“尊臺”“老尊臺”と呼ぶことができる。王子は“王爺”、公爵は“公爺”など[と呼ばなくてはならない]。注意点として、我々と話している人が[何らかのかたちで]誰かの支配下にあり、

我々が対話者が所属する人について尋ねるときには、その人[すなわち我々が話している人]と同じように上役を呼ぶべきである。もしその人が“大老爺”と言え、我々も“大老爺”と言うべきであり、もし[その人が]“老爺”[と言え]、“老爺”と言い、もし[その人が]“相公”[と言え]、“相公”と言う。

第2パラグラフ：官僚の親類をどう呼ぶか

実際にいる官僚の親類を呼ぶための、敬称としての名前がある。これは他の人には使えない。例「あなたの父」「太爺」、「その人の息子」「公子、相公」、「その人の母」「老太娘」、「その人の妻」「奶奶」。もし偉大な官僚や太守なら[その人の父]“大老爺”、「その人の妻」“老太”、「その人の妻」“太太”、「長男」“大叔・相公”、「次男」“二叔・二相公”など。「その人の祖父」“太公”、「その人の祖母」“太祖母”、「その人の娘」“小姐”。「その人の妻の兄弟」“舅爺”、「その人の上のおじさん」“伯爺”、「1番目の妾」“二娘”、「2番目の妾」“三娘”など。「長兄」“二爺”、「次兄」“三爺”など。これらの[兄弟の]妻は[兄弟を示す語意の]後に“娘”を加える。「長男の妻である義理の娘」“大叔孀”、「次男の妻」“二叔孀”など。「その人の義理の母」“太奶”。これらの語彙は官僚と話しているときだけでなく、他の人と話していて上述した官僚の親類に話が及んだときやそれら近親者と話すときにも使う。官僚の執事は“大叔・相公”と呼ばれる。「あなたの椅子籠」“?(12) 駕”。これらの語彙は官僚だけに用いられる。官僚ではない人や[もはや]官僚ではない人には用いられない。

第3パラグラフ：対話者をどう呼ぶか、会話と書面で自分をどう呼ぶか。

1. 官僚をどう呼ぶかはすでに述べた。次に対話者をどう呼ぶかについて[学ばなければならない]。誰にでも同じように話していいわけではない。我々はこのことに相当注意すべきだ。身分の低い粗野な人には「あなた」を意味する“你”を使い、自分自身は「わたし」を意味する“我”を使えば十分である。普通のクリスチャンはそれぞれがもつクリスチャン・ネームで呼ばれよ。その他の人は、尊敬すべき人なら“兄”「兄」と呼ぶ。同様に「弟」を意味する“弟”も使える。もし目上で、より尊敬すべき人なら“老兄”[尊敬すべき兄]と呼ぶ。学者や“秀才”“先生”[先生]は“老兄”や“相公”と呼ぶ。その人たちの前で自分[に言及する場合]は“小弟”[と言う]。もし我々が話している相手が“舉人”“進士”(13)“學官”“貢生”(14)ならば、“老先生”すなわち「老脚」と呼び、自分自身は“學生”すなわち「弟子」と言う。高貴な家の出身であり、学生でもある若者は、「有能な人」を意味する“賢契”と呼ぶ。注意点として、“號”と呼ばれる2文字の語彙がある。彼らの安否を問うとき[個人を]呼ぶのに用いられる。もし彼らが博学なクリスチャンなら、いつも洗礼名で呼ぶ使用人と彼らを区別するために、これら[の語彙]を使って呼んだり質問するのが賢明である。もし敏感であろうとするなら、使用人を他者と区別するべきである。キリストの助けにより我々は後者にはこ

の規則に従うべきである。この他に家の使用人と同じように、クリスチャン・ネームで呼ばれることを気につけない、一部の尊敬すべきクリスチャンもいる。

2. 官僚ではない人の前での自称については取り扱ったので、次に官僚の前で自分をどう呼ぶかが残された唯一の問いである。市や町の長官のような下級官僚の前では、自分を“小弟”や“學生”と言う。情勢について討論するときには、“小弟”の方がよりふさわしい。“道翁”やその他省の高級官僚と話するときには、自分を“生”「遅れてきた弟子」と言う。太守や將軍の前では自分を“旅人”“遠人”「遠くからきた人、旅人」と言う。公的な訪問に関する書面での自称については、特別な注意が必要である。“部院”“撫院”(15)“將軍”“提督”(16)には“西儒なにがし”と書く。よりひかえめな態度を示すためには、“西儒なにがし”の後に“司道”“道翁”“總兵”を加える。

市や町などの長官へは[自分を]“西儒なにがし”と書く。すでに会ったことのある相手なら“通家世教弟なにがし”“教生なにがし”と書く。先生や博士、“學官”には“通家世教弟なにがし”“教生なにがし”と書く。注意点として、我々が“西儒”を使いたくなければ、“遠西”という2文字を書くこともできる。これは他の2文字よりはよい。また他に注意点として、太守を訪問する時には“手本”(17)を使うとこは許されない。“全帖”(18)を使うべきである。

わたしが省略した2,3のより細かな点がある。それは一般的な使用法をあげれば、すぐにわかることなので記さなかった。この点だけ言えば十分である。すなわち“帖”(19)に書かれる文字は大きくてはだめで、小さくなくてはいけない。とても偉大な官僚へ[送るとき]は、いっそう小さく書かなければならない。大きな書体は傲慢にみえるため、誤解を生じる。

(20)

第16章：会話での礼儀正しい言葉と訪問及び招待の際のマナー

中国人は様々な面で極端に走る傾向があるが、訪問の際の言葉と行為は格別である。それで一層、実際宣教師には、いつも彼らが芝居をしているようにみえてしまう。しかし彼らから好意を得て、彼らが喜びと楽しみをもって福音の言葉を聞くことができるようにするためには、避けがたいことである。ちょうど釣り針につけたえさのようで、それにより我々は魚をつかまえることができるのだ。我々は漁師であり、彼らの魂をつかまえるために、注意深く自分の技術を使う必要がある。不便だと思ふという理由だけでそんざいに扱うことは避けるべきだ。

第1パラグラフ：会話での礼儀正しい言葉

1. “請”は上品な使用法によく用いられ、意味は「心から願う、頼む、請う」である。だれかになにかを頼むときにも用いられる。例「お話したいことがありますので官僚様に超越し願います。」“請老爺說話”。“どうぞお入り下さい”“請進”。“お先にどうぞ”“請先”。“お

顔を見せて下さい」「請見」。「ご飯をどうぞ」「請飯」。「お休み下さい」「請睡」。「お教え下さい」「請教」など。このようにだれか重要な人になにかを頼んだりお願いするときには、常に“請”を前につけなければならない。とても一般的であり、用語集でこの語彙を参照することが望ましい。

2. “領”もとても一般的で、上の人や重要な人から受け取るものにはこれを前につけなければならない。“領命”「わたしは命令を受け取り、あなたに従う」。「わたしはあなたの教えとあなたの教義を受けた」「領教」。「わたしは〔何かを〕受け取り、感謝しています」「領謝」。謁見〔室〕の書記や役人が官僚の公文書を受け取りに行くとき“領文書”と言う。「洗礼をうける」「領聖水」；など。他のものについては慣用法から学ぶことができる。“見”は上品な表現に用いられる。誰かに礼儀正しく「気を静めて彼を許してくれませんか」と言うとき“見怒”と言う；「彼を愛する」「見愛」など。“見”は我々の言語で誰か知っている人が我々になにか頼みたいと言うとき、我々が彼に「あなたは我々になにかを言いたいのですか」と言う場合にも用いられ、“有甚麼見教”と言う。

3. 「あなたに従う」は“伏命”“領命”と言う。これはどちらが先に行くべきかについて2人が礼儀正しさを忘れて言い争っているときに用いる。もしわたし〔が先に行く〕なら、わたしは“伏命”と言う；など。誰かに感謝するときには“多謝”“多蒙”“感謝”“感慕”と言う。「あなたから多くの親切を受け取った」「多蒙」。誰かに何かしてほしいと頼んだとき、後で彼に「あなたを疲れさせた」「あなたから多くの親切を受け取った」などと言うときは〔すなわち〕“多蒙”“多勞”と言う。誰かの前に行くとき、そこはその人が先に行くことになっていたため、わたしが彼の場所を奪ってしまったと言いたいときは、“僭先”と言う。これは人より先に食べるなど他の動作にも同様に用いる。誰かに自分自身がふさわしくないと思う行為や言葉でほめられたとき、自分ではそれを受けてもやはりそんな好意を受け取るべきではないと思っているので、そんな好意はあえて受け取れないと言いたいときは、“豈敢”“不敢”“豈有此理”と言う。意味は「どうしてわたしがもてよう、どうしてわたしがそのような好意を受け取れよう」である。そのようにしてそうしてほしくない、受け取りたくないことを示す。誰かに自分がしゃべりすぎてその人を疲れさせてしまったと言いたいときは、“輕吵”「わたしは軽率さからあなたを苦しめてしまった」と言う。もっとよいのは“多言？耳”「わたしはしゃべりすぎてあなたのじゃまをした」である。ある仕事をやってもらうために自分を訪問してきた人には“勞駕”“有勞”“煩惱”「あなたに骨を折らせました」と言う。誰かを訪問しに行ったとき、その人が自分に座ることを許可するために椅子を掃除しようとしたときは、“免勞”“不敢”「お手数かけてすみません」と言う。自分が辞去の意を告げたとき、人に戻ってそこから〔自分を見送るために〕歩を進めないよう言うためには、“請轉”“請回”“留步”と言う。これは「戻る、遅らせる」であり、そう言われると相手は“送到門”「ドアまで一緒に行きます」と答えるだろう。もし客が椅子籠や馬で来ていたら主人は“候乗”「あなたが椅子や

馬に乗るのを確かめます」と言うだろう。そしていよいよ別れるときには、お互いに“請了”と言う。タタール族 [すなわち満州族] の官僚の間では“去了”と言う。

主人が [客に] 「暑いので帽子をとってください」などと言いたいときには、“請寛”“請便”と言う。“請便”はまた [客に] 何か身につけているものをとってほしいときにも用いられる。客は到着するとすぐに、主人に向かって“拜” [おじぎ] をする。このとき客は“來奉拜”すなわち「あなたに敬意を払うためだけに来ました」と言わなければならない。すると主人は“久未”；また [訪問者が] 官僚なら“久仰”；または“勞駕”“有勞”と答える。主人は椅子を設置したあと、客に“請上”「上座にお座り下さい」と言う。客がそれを辞退したとき、初めての対面なら、主人は“此會上坐該然”すなわち「今回は、初めてお目にかかるので、あなたが上座に座るのが妥当です」と言う。客が官僚や重要な人物なら、その人が座ったあと、敬意を表して“恭喜老爺久慕大德，相見之遲”と言う。「風が送れるように扇子をだしてください」と言うときには“請扇”と言う。重要な人物にその人を信頼している、頼みとしていると言いたいときには“請盼”すなわち「よい目でご覧ください」という 2 文字を用い、それには“奉命”「あなたに仕えます」と返答する。何か送るといときには“送上”と言う。「あなたから好意を受け取った」“蒙恩”。「お座りください」“請坐”。「あなたをお出迎えしませんでした」“失迎”“失接”。「礼儀に欠けるところがありました」“失禮”。「あなたからの敬意を失いました」“欺慢”。「あなたの手にキスをしに来るのが遅れました」“拜得遲”。「あなたに許可を求める」“稟命”。「あなたにいとまごいをしに来ました」“告假”“告辭”。「あなたをお待ちします」“俟候”。「お好きなように」“尊裁”。「お先にどうぞ」“請先”。このような表現は他にもたくさんある。いくつかは次の 2 つのパラグラフで取り扱うが、多くは用語集にその例が見える。

第2パラグラフ：外観上の礼儀

1. 宣教師が官僚や重要な人物を訪問するときには、彼らが“禮貌”と呼ぶ、外観上の礼儀作法に注意する必要がある。その助けとして、ここに最も一般的な例をあげる。南方では“作揖” [儀式的なあいさつ] を行う上で最も尊敬すべき位置は右側である。ゆえに主人はそこで“作揖”を行うために常に客を右側に配置する。しかし注意点として、主人が“作揖”を行うために自分を客と一緒に配置したときは、同じ位置で“作揖”をしてはいけない。それどころか [主人は] 後ろへ一歩退く必要がある。北方では客は左側にいかなければならない。しかし注意点として、一緒に歩くときは全国どこでも左側が最も尊敬すべき位置だと考えられている。ゆえに敬いたいと思う相手と一緒に歩くときには、ちょうど [我々] ヨーロッパ人の間では右側に [敬いたい相手を配置] するのと同じように、相手を左側に配置する必要がある。そして歩くときには常に少し後ろに従い、客が自分より少し前を行くのが見えるようにする。重要な人物がわたしを訪問したときには、南方の慣例に従って“作揖”をするために、

その人を右側に配置する。するとその人は“北禮”と言い、わたしは“南禮”と答える。わたしが誰かを訪問するときにも、同じことを言う。これがよいマナーである [と考えられている]。客が“作揖”をするとき、右側にいなかった場合は、“作揖”をした後で彼に“回禮”と言う。もしそう言った後でもその人が反対側に行こうとしなければ、その人から一度“作揖”を受けたかのようにして、同様にもう一度その人に“作揖”をする。

2. 客が到着するとすぐに、主人は客を出迎えに来る。そして客がドアまで来たら、主人は自分を客の右側に配置し、“請”と言ってから、客の左側を歩く。ドアを通過しなければならない場所についたら、主人は立ち止まって客に“請”と言わねばならず、先に行ってはいけない。“廳”についたら、主人は客を右側に配置し、客に肩を向けないようにしながら客の前を通り、“作揖”を行わなければならない。それからこの儀式に割り当てられた言葉を使う。お互いに初対面ならば、どちらかが相手に何かしたり、あるいは相手のために何か用意しておいたり、またはプレゼントをしたあとで、恩恵を受けた方の人から、“作揖”を行うときに、“謝”“多蒙”「わたしのためにしていただいたご親切に感謝します」という最初の言葉が発せられる。これは恩恵を受けてから長い時間が経っていたとしてもこのように言う。誰かにプレゼントをして、その場でもしくは後でその人から感謝されたときには、“禮輕情意重”すなわち「プレゼントは小さいですが [あなたに何かあげたいという] 気持ちは大きい」と答える。または“薄意”すなわち「つまらないもの、少量の意志」と答えてもよい。官僚が訪問してきたときは、ドアまで彼を出迎えに行き、“多蒙光降”“多蒙賜顧”と言う。何か頼みたいことがある重要な官僚を訪問しに行ったときはこのように言う。“遠人九萬里孤旅，外無所靠，如今老爺照顧遠人，必是老爺的功德”「わたしは旅人であり九千里の向こうから来ました。この世界であなた以外に頼る人はなく、わたしの望み全てをあなたに託しています。もしわたしの面倒をみてくださるなら、あなたにとって良き？ (21) となるでしょう」。それから彼にお願いしたい、頼みたいことを全て告げることができる。

3. “作揖”をした後、主人は名誉の座席である右側の座席をきれいにする。またもし主人が官僚だったり客がとても重要な人物なら、主人は“廳”の中央に椅子を置き“作揖”を行う。客も“豈敢”“免勞”と言いながら“作揖”を行う。そして客は同じことを左側の椅子で行う。坐ってからは、彼らはその同じ椅子で“作揖”を行い、会話を始める。しかし客は決して用件である重要な話題から会話を始めてはいけない。“茶” [茶] がくると、両手で受け取り (片手でものの受け渡しをするのは無作法である)、もう一度“作揖”が行われる。そして主人は“豈敢”と言う。“茶”は少し時間をかける必要があり、相手が飲んでいる間は話をしてはいけない。二人とも飲みおえると、茶わんを両手で盆に置く。もし暑い季節なら主人は扇子を取り出し、扇子を開く前に客に“請扇”と言う。そのすぐ後で扇子を少しずつ開き、お互い静かに自分をおぐ。扇子で忙しく自分をおぐのは礼儀正しくない。また足を組むのもよくない。ゆえに坐るときは両足をまっすぐそろえ、椅子の背に肩をつけてはいけない。話していると

きに、手で多くの動作をするのも礼儀正しくない。声を上げたり速く話すのもよくない。間をおき、威厳を以て話した方がよい。2 番目の“茶”がきたときは、“作揖”は行われず、代わりに軽くおじぎをする。注意点として、主人は客より先に茶を飲んだり茶わんを盆に置いたりしない。客が立ち上がれば主人は客に同行する。客が立ち上がると客の左側に行き、常に一步後ろに控える。ドアに出くわせばいつも背後に立ち、道路にたどり着くまで [毎回] 客に先に行くよう“請”と言う。すると客は“不敢”と答える。道路に面したドアにたどり着くと、主人は自分を客が向いているのと反対側に配置し、お互い“請了”と言う。客が椅子籠や馬で来ているなら、家の中庭から入るかもしれないので、主人は客に中庭に入るか尋ね、中庭まで同行し、客が椅子籠や馬に乗るまで見届けなければならない。別れるときは両者がお互いに“請了”と言う。これで喜劇は終了し幕間に入る。

第3 パラグラフ：招待されたときの礼儀作法、及びいくつかの注意事項

1. 宣教師は時に官僚から招待される場合があり、どうしても招待を受けなければならない状況が起こりうる。以下に招待されたときのふるまい方について記す。最初に届いた書信は、覚え書きまたは“帖”であり、これは辞退する。招待状が“單帖”ならば、“單帖”を用いて [返事をする]; “全帖”なら、“全帖”を用いて [返事をする]。書信を運び返事を持ち帰るの本人ではなく、召使である。2 回目の招待状が送られてきたら、断りたければ断る。しかし 3 回目は断ってはいけない。それは失礼である。(もし招待状を出した人が市長や将軍や太守など高位の名士ならば、最初の招待を受けなければならない。) 招待状を受け取り日程が決まっていれば、時間を控えておく。到着したら“作揖”を行う。そこに他に官僚がいたなら、彼らは宣教師に一等席を与える。宣教師はまず (低い席にではなく) 名誉の席にいる人に“請”をする。もしその人が官僚で市全体に権力のある人であったり、年長者である場合には、宣教師は彼に“小弟在老爺貴治下”と言う。“茶”が届くと、その礼儀作法が習慣的に行われる。主人が立ち上がると、客は全員立ち上がり、酒とはしを並べにテーブルに [主人が来る?] (22)。わたしはもといいた場所から一步後ろに下がり、“作揖”をしながら、主人に“不敢”と言う。全員に酒が注がれると、わたしは前の儀式を見習い、主人に酒を勧めに行く。客は普通これ [実際に酒をつぐ役目] をやりたがらず、最初に酒をついで欲しいという意味の [儀式的な] あいさつが行われ、全員が座っていることへの言い訳をし、召使いが酒を注ぐ。全員が席に着いたら、わたしは“小弟為外國的人、行禮恐 [唐突〜贖?] 求老爺海涵”と言う。全員が席に着くと、召使いが大声で“請酒”と言う。すると主人はまず礼儀作法として頭を下げてから、酒を飲み始める。彼らは“請乾”と言いながら、杯を傾ける。彼らが“請菜”と言ったら、はしをとり、両手で持ちながら、礼儀作法として頭を下げる。客に食べる時間をとらせるため、主人はゆっくり食べなければならない。茶番狂言に転機をもたらすものとして、彼らは“真正不曉得”と謝る。これは次に行きましょうという合図である。すると 3 つ

目の茶わんが運ばれる。これには肉汁が入っている。こうして最初の食事が終わりを告げる。

2. 彼らは立ち上がると、別の“廳”に行く。そこでは全員が中庭で小便をする。それから坐って話をしていると、手を洗うための水が運ばれてくる。もし宣教師が高位にあるなら、他の人が自分の手を洗えるように、彼らに丁寧な言葉をかける。全ての終了が告げられると、彼らは引き続き座って小さな果物を食べる。そしてわたしの召使いが 4 つの飾りの付いた袋をもって [くる]。そこには銀が入っており、それぞれ受取人を記した札が付いている。1 つは料理人のために、もう 1 つは酒をついでくれた人たちのために、もう 1 つは [芝居の] 役者たちのために、もう 1 つは笛吹たち (23) のためである。ときにはもう 1 つ招待状を持ってきた人のための袋が含まれることもある。役者と召使いのための 2 つ袋はあとの 2 つよりも少し多めに入れる。なぜなら足りないに分けられた後には何も残らなくなってしまうからだ。それぞれ [の袋] にどのくらい入れるかについては、教えられない。なぜならそれは招待した主人である官僚によって異なる。もし高官なら、多めに入れなければならない。袋は主人のテーブルの下に置き、主人に“多謝”と言われたら、“不敢”と答える。こうして徐々に食事は終了する。こうして 2 つ目の茶番狂言が終わりを告げると、ざわざわと喧噪と騒ぎが起き、全員が立ち上がり慣例に従って別れを告げる。次の日感謝の意を表すための“帖”を送る。受け取った主人は、それに感謝する必要はなく、これにて幕間の出し物は終了する。

3. 注意点がいくつかある。第 1 に、招待が官僚からではなく、役者と笛吹がいなければ、袋を渡す必要はない。しかし、官僚ではない役人でも、もしふさわしいと思われれば、渡しても良い。宴会の始めに主人が“沒有菜”と言え、ば、“品物”と答える。第 2 に、官僚や重要な人物が自分を訪問しにきて、[返礼として] 自分がその人を訪問した場合は、“作揖”をする時に“前日蒙老爺 (先生) 先視”と言う。しかしもし、わたしが [その人を] 訪問したとき、主人が家におらず、後日 [その人に] どこかで出会った場合は、“前日奉拜大 [台?] 駕公出不遇”と言う。そのような人物が、自分を訪問したとき、自分が家におらず、後日どこかで偶然であった場合、その人に“老爺 (もしその人が官僚なら) 賜顧學生不在家裡失迎得罪”と言う。第 3 に、誰か重要な人物が自分を訪問した場合、(上述の言葉以外に)、その人を出迎えに出たとき、“作揖”をしながら“久仰~”と言う。自分が誰かを訪問した場合、[帰るために] 立ち上がったとき、“告假 [?] 改日再來領教”、及び“謝茶”と言う。もし自分の家に来た客から帰るとき“謝茶”と言われたら、“粗茶”と答える。第 4 に、もし官僚から招待されて、帰った [その] 後に、いくらか金を送られたら、[これは] 受け取る必要があり、“單帖”でお礼状を送らなければならない。[書面で] 祝辞を伝えるには“慶賀”の 2 文字を用いる。しかしこれは祝辞を受け取る人に [声に出して] 言う言葉ではない。そうではなく、その人には“恭喜”「共通の喜び」(24) と言う。最後に、注意点として、もし自分を訪問しにきた人が、“帖”を持ってきたら、重要な人物でなくても、その人の訪問しなければならない。もしその人が“全帖”を持ってきたら、“全帖”で [答えなければならない]。もし [その人が持

ってきたのが] “單帖”なら、“單帖”で [答えなければならぬ]。いつ“全帖”を使い、いつ“單帖”を使うかは、規則化できない。おじぎの仕方、はしの取り方などについては、書面で記述できるものではない。他の人がするのを観察して学ばなければならない。

言語学習のために限らず、訪問のときや招待状を送るときなどに用いられる儀式的な動作のために、様々に提供してきた全てに、我々は今や疲れ果ててしまった。これらは全て実践と年月が教えてくれるものである。全てを知ることにはできないのは明らかだ。おそらく宣教師でないこの国の人が、招待に関するこの [章] を読めば、間違いなく「この国の良き宣教師が結局はくだらないことに従事している」と言うであろう。またその人 [部外者] から「彼らは良き受難の地 (25) を歩いている」と言われるのももつともである。確かに宣教師にとって謁見の場に行くことは受難であり、宴会にでることは十字架である。辞退したいと思わないものはいない。しかしそれどころか、不本意でも、長ったらしく退屈なものであっても、機会があれば自分から [訪問しに行くなど] 申し出るのだ。全ては魂の名誉と幸福のためになされる。それは宣教師にとっての得策であり、とりわけ我らの聖なる教義 [と]、我らの神の名誉と栄光を賞賛するためである。その名誉のもと、その母であり聖母処女マリアの [名] もとに、宣教師が最初にこの語法を学ぶ上でのモデルとして、この短い論文は書かれた。

[神の職務日課の] 復唱規則を学びたいと願うものに、その目的を達成するための指導書と道具が必要であるように、この語法を学ぶものにも規則が必要である。神よこれら [の規則] を有用ならしめ、前に進む道を開かせ容易にこの迷宮に入らせ給え。

ごきげんよう。

1682年2月18日福建省都にて書き終える。

FINIS

注釈

- 1) Lazonda は明らかに lancada (= obrada) 「2 頭の雄牛が 1 日に耕せるだけの土地」の変形である。
- 2) ここの「3」は「13」の誤りであると思われる。
- 3) アメリカ国会図書館稿本のこの章は 1703 年版と異なる。補遺 III にその訳がある。
- 4) 余計な san (三：訳者注) は明らかに間違えて付け加えられたものである。
- 5) すなわち、以下の第 4 パラグラフの 1 に概説される通りである。
- 6) 彼らは彼が答えを知っており、ここに記された 60 年の周期の語彙を用いて答えることができるという予測のもとに尋ねている、という意味である。
- 7) これが何を指すかは不明瞭である。
- 8) スペイン語 el arte viejo (que llaman)。この書はまた 11 章でも簡単に述べられており、ここでは el otro arte 「別の文法」と呼ばれている。以下 12. にも更にコメントがある。
- 9) ここの「わたしの名前」という語彙は不注意で繰り返されたようである。
- 10) En audiencia pro tribunali は、スペイン語とラテン語の混在した構文である。
- 11) 予備学位を受験する候補者の学習を指導する地方官である。ここでは（原文は“hio kuones”：訳者注）スペイン語の複数を表す-es が中国語に付け加えられている。
- 12) 不明瞭な単語はおそらく lung、tung、hing のいずれかであろう。
- 13) 皇帝の試験制度（殿試：訳者注）で 1 位、2 位、3 位の学位を取得した者。
- 14) 上位の免許所有者（生員のうち選抜されて都の国子監に入学したもの：訳者注）。
- 15) 省知事の別称。
- 16) 省の司令官長。
- 17) 二流の役人の名刺。
- 18) 5 葉に折り畳まれた 1 枚の赤い紙で、とても正式な時に挨拶状として用いられる。
- 19) 挨拶状、招待状。
- 20) アメリカ国会図書館稿本はこの章を削除し、代わりにより長い 1 節を用いている。この差は次の章全体に取って代わっており 1790~93 年版テキストの結論となっている。補遺 III にその訳がある。
- 21) この文の最後の文字は不明瞭である。
- 22) この言葉は印刷が不明瞭である。
- 23) スペイン語 chirimiteros、文字通りの意味は「オーボエ奏者」。
- 24) “恭”「尊敬する」が“共”「共通する、共に」と誤解されている。
- 25) すなわち、このようなジェスチャーゲームに参加することは信仰上の責務であることを意味する。